

生分解性マルチ (Bio-PAL) の 薄肉化効果確認試験

JA十勝清水町

梶山 貴史



6月3日 試験区



6月3日 慣行区



7月17日 試験区1



7月17日 試験区2



10月27日 試験区



10月27日 慣行区

試験目的

生分解性マルチ (Bio-PAL) の薄肉化効果確認試験

試験作物 及び品種

南瓜
品種名:九重栗(白)

試験資材 及び数量(規格)

Bio-PAL (0.012mm×135cm×400m) 透明 有孔
畝間66cm×株間60cm×2C 60φ

慣行資材

ビオトップマルチ (0.02mm×135cm×400m) 透明 有孔
畝間66cm×株間60cm×2C 45φ

栽培方法

播種日	収穫日
6月4日～5日	9月22日～23日
【栽植密度】 畝幅:66cm 株間:60cm 約1,000株/10a	

資材使用期間

6月3日～

試験区面積

約20a

試験結果

(1) 作業性について(慣行品との比較)

展張時のフィルム強度や伸びについては、慣行品と変わらず作業できた。

肉厚が薄くなっていても、作業性・作業効率に影響はなかった。

(2) 作物の生育状況または、収穫への影響

試験区では、少し日当たりの悪い場所があったが、マルチなどの要因による生育差や目立った違いはわからなかった。慣行区と差は無いと感じた。

(3) 資材の強度・耐久性・崩壊性について

試験区の方が分解が遅い。

モニター感想

展張時などの使い勝手は特に気になる点も無く、良かった。

来春までにほぼ分解していることは、生分解性マルチを使用する上で重要なポイントと考えている。

牧草地の近くだと、フィルム片が飛散してしまうことが懸念されるので、分解は鋤き込む少し前あたりから急激に進むのが良い。

JA担当者の感想(生産資材課 佐藤 氏)

マルチの薄肉化によって、長尺巻きにできることでマルチ交換作業の省力化に繋がることは、生産者にとってもメリットがある。普及拡大には、展張時に問題がないだけでなく、分解性と導入コストも重要なポイントとなる。

引き続き、分解性の調査は行っていくので、優位性のある価格設定をお願いしたい。

今後の使用について

継続して使用したい。

今後も継続して使用するかどうかは、今後(来春頃)の分解状況と価格条件によって検討したい。

1 高温対策

2 青虫忌避効果

3 クリーンシート

4 機能性マルチ

5 育苗資材

6 酪農資材

7 省力化資材

8 その他